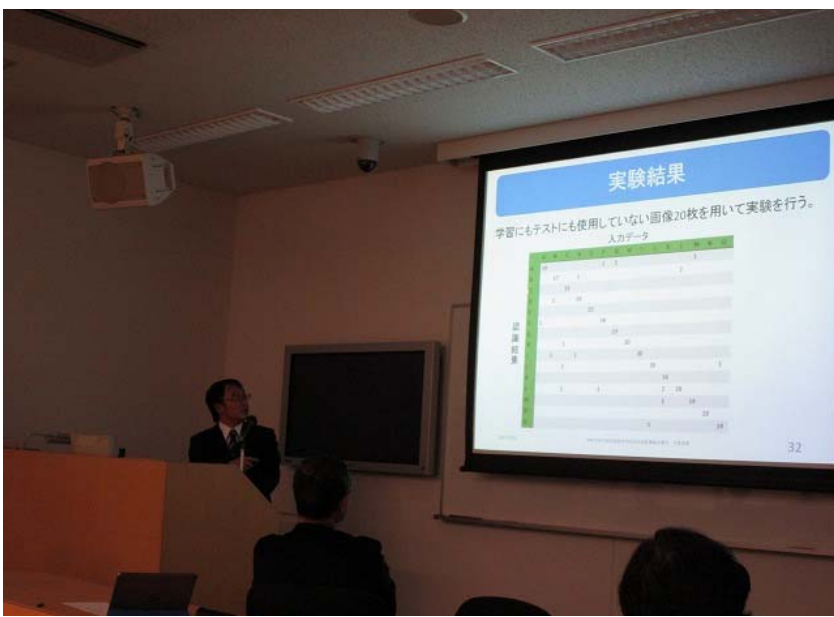


田中研新聞

岡田君、修士論文中間発表

11月20日に中間発表があった。私は過去に3回中間発表を見ていたが、とうとう自分が発表する側に立つことになった。自分で発表の舞台に立つとやはり違う緊張感があり、今回は部屋もいつもと違い会議室で行ったため、奥が見渡しやすく、人の顔が良く見えた。平日というのもあったからか、いつもよりも学部学生の姿を見て、来ている学部学生もT Aで見たことがある学生もしくは、アルバイト先で見たことがある学生がほぼ全員来るのは分かっていてのことなので、そちらの部分の緊張はあまりなかったのだが、学部学生がみんな来るとは思っておらず、そこに対する緊張がとて強かった。発表中はというところ、自分の発表内の発言によって表情が曇る人もいれば、頷いている人もいるのがよくわかるのは、発表してよくわかったのだ。緊張はしていたのだが、そこまで慌てておらず、冷静だったのだと終わってから自己分析した。

自惚れなかもしれないが、今回はいつも以上に質問の内容を理解し、それに対して答えられたと思う。というのも、1年半



もの期間、それこそ必死の思いでやってきたことで、質問内容もほとんどが過去に実験をして上手くいかなかったことや、時間をかけた部分であった。だからこそある程度はしっかり答えられることもできたと思うし、あれだけ怖かった質問時間も途中からは質問時間そのものを充実していると捉えることができた。もちろんコメントのなかには、ここは不十分だという意図の指摘もあったので、そこは本番への改善点としておきたい。

残された期間はそこまで長いものではないが、自分の成長のためはもちろんのこと、研究室や現在の研究室メンバー、未来の研究室メンバーのために残せるものや、伝えることができるものがあれば、残していきたいと思う。(岡田)

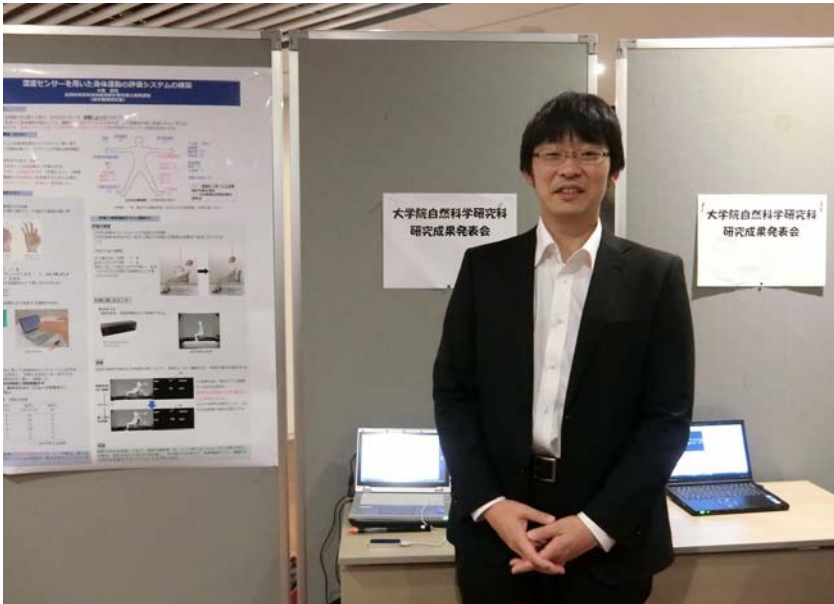
岡田君のプレゼンテーションのうまさには定評があるが、今回の発表では、多くの学会発表や論文発表など、日頃からの地道な努力を明確に示すことができていました。新規性、有用性をどのように示すかということが唯一残された課題であったように思われます。いままでやってきたことの中にそれは十分含まれているので、あとはそれをどのように表現するかということでしょう。(田中)

研究成果発表会がありました

当研究室からは大西さん、岡田君が発表

第53号
2017年
12月10日発行

2017年12月10日号
甲南大学知能情報学部田中研究室 毎月発行
http://carnation.is.konan-u.ac.jp
編集... 田中雅博



平成29年11月18日午後、甲南大学大学院自然科学研究科の成果発表会が行われました。この発表会の趣旨は、他分野の専門研究をお互いに知り、様々な分野の先生方や大学院生、あるいは学部生など意見交換を行いました。研究を充実させることのように思いました。このような経験は普段できることではなく、冷静で的確な質問や意見を聞くことができ、新たなアイデアが生まれたり、研究を改善する一つの機会になると思い、参加、発表しました。

私は、この4月に博士後期課程に入りました。今日までの研究についての概要です。様々な障害を有した方々が生活の復帰を目指して、リハビリを実施しています。療法士は、その目標を実現するために、障害の

度や対象者の身体の状態を把握するために、様々な検査(評価)を行います。それらは、目測で行われるため、客観性にかける、療法士(検査)の判断によって評価の結果が異なるなどの問題が現れます。その曖昧さをなくすために、日々のリハビリ業務の中で簡便に、かつ客観的にデータを取得して評価する(できる)方法はないか考えていたところ、「センサー」に着目しました。現在では、脳卒中片麻痺評価法(SIAS)という、検査バッテリーについて、センサーであるLeap Motion(手の運動を計測することが可能)やKinect(身体の運動を計測することが可能)を用いて評価する方法のシステムの開発に取り組んでいます。ここでは、L

Leap Motionを用いた手指テスト、Kinectを用いた体幹機能を評価するシステム開発について紹介しました。

ポスター発表であり、自由で討論させていただきました。今回作成したシステムと療法士が評価する内容が一致するかどうか、仮にシステムが完成したときの使い方、普及方法など、普段考えないようなことに触れることができ、この研究を前進できるようなヒントを多く得ることができました。

この日は、肌寒く、雨が降っていましたが、多くの方が聴講されていたようでした。充実した1日となりました。来年もこのような機会があれば参加したいと思えます。(大西)



11月18日に自然科学研究科の研究成果発表会があった。この研究成果発表会は、知能情報専攻だけでなく物理や生物なども含めたポスター発表による発表会であり、修士や博士だけでなく、一部学部生なども参加している発表会であった。

前半と後半のセッションに分かれ、私は前半のセッションであった。私のブースのスペースが甲友会館に近い出入り口の付近であり、個人的にはとても良い位置だったと感じている。

45分間のポスターセッションの時間中、絶え間なく説明することになり、とても多くの人から質問やコメントを頂くこともできた。知能情報の先生方からフィードバックや画像増幅に対する質問などがあつたが、説明したところ納得してもらえたことで、自分のやってきたことに対して多少は自信をもてる結果となった。調子に乗るとロクなことがない

のは経験上わかっているのだが、今回に関しては成功と言ってよいと思っっている。

後半のセッションでは、聞く側に徹していた。同じ研究室の大西さんの研究内容についても、なんとなくは知っていたものの、しっかりとわからなかったのが、今回聞かせてもらったことで一層理解を深めることができた。そのほかにも同期や先輩の発表を聞いて、内容は勿論だが、ポスターの作りかたや、発表の魅せかたなど、まだまだ学ぶことが多いということには痛感した。物理や生物の発表は英語のポスターも多く、これから英語で発表をする機会を控えているので参考までに見てみたが、基本的な単語はともかく、専門用語が多すぎて私には読めなかったが、説明してもらった。なんとなくは理解できた。こういう専門外の人に説明するという技術も私にはまだまだ足りていないので、今後培っていかたいと思っっている。

発表では多くの人に聞いてもらえ、聞く側でも多くのことを学び気付けことができて、全体を通して私は大満足な1日であった。今後もポスター発表を控えているので次回以降この経験を生かして更なる成長へとつなげたい。(岡田)

新しくできたiCommsでの発表会でした。学会とは違い、まったく専門が違っても他専攻のポスターと一緒に発表会でしたが、知っている先生方との話もでき、いろいろな意味で有意義なものだったと思えます。

ともかく、場数を踏むというのが何事も成功する秘訣です。こうしたことに、今年の2名の院生は前向きに取り組んでくれており、このことは将来、彼らの中で実を結ぶことと思えます。

指導教授より

岡田君、自動制御連合講演会で研究発表

11月11日 電通大



11月10日から12日まで連合講演会のために東京に行っていた。発表自体は2日目の朝一番目の発表で、8時45分から1人の持ち時間は15分の発表であった。今回、動画を再生している途中にPowerPointが落ちてしまうというトラブルがあったのだが、そのくらいのことでは動揺しないようになった。発表も無事終わり、質疑応答も「未知の人物の判定の際にはソ

フトマックス層を適応していない数値を見ればよいのではないかと、というものであり、実験をすてにしていたのもあり、その質問に対しての受け答えもしつかりとできた。セッション終了後、その質問をしてくださった先生が声をかけてくださり、いろいろと話をさせて頂き、意見の交換をすることもできた。そのままお昼も一緒に食べていた。ほ



ど意見交換を行った。常駐しているKoroについても興味を持っていただき、お褒めの言葉も頂いた。研究室としての成果物を評価してもらえるのは、私がい

さて、話は変わり学会外の話をして思う。東京は初めてではないのだが、高校のときにサッカーの全校応援があったのと、小学生のときにゲームの大会の全国大会に来た以来であり、はつきり言って大して

最近思うこと

田中雅博

余白ができたので、最近思うことを、徒然なるままに書き記してみたい。

授業

サンデル教授の「ハーバード白熱教室」というのが一時流行したが、記憶にある人も多いだろう。この授業は、いわゆる「参加型学習」で、教授がいろいろな

問かけをし、それに対して学生がフロアーから答えるという問答を繰り返す形である。どちらをとっても人が死ぬとき、どちらを取るかというような、あり得ない問いを発するところが大変ユニークだった。振り返って、日本の授業でこういうことができるかというのを得ない。まず、そういう問いを授業でしたということがマスコミの喜びそうなネタになるだろう。翌日の新聞に出る可能性が大きい。もちろん、批判的に書かれる。人を死なせてしまうことを余儀なくされる2つの選択肢から選べるとは何事かと。物事を考えるときに、常識も何もかも捨てて議論するということが重要と書かれた看板の店に入っ

であるが、今の日本ではそういう議論が許されない風潮がある。

学生も、そういう問いを発せられるからには、最後に、どちらが正しいかというものを教授の口から教え

てもらいたい。この授業ではないだろうか。我々の学生時代は、答えがないような問題を夜が更けるのを忘れて議論することが多かった。それが新生活だと思つて、とても新鮮だった。私は学生運動をしていなかった、いわゆるノンポリだったが（これも、当然死語だね）、それでも、こういう会話はよくした。妻にこういうことを話すと、それは自分が歳をとった証拠だという。授業の中で、黒板の前で試行錯誤することを、学生は決して許してくれない。ノートに書きやすいように、きれいに整理して書くことを要求し、書き間違いを許してくれない。書き間違いを許すと、きめん、授業改善アンケートで批判される。

の後の人生の中で得ることが多い。海外旅行で、自由に自分の思うような計画が立てられるというだけでなく、仕事の上でもメリツトが大きく、重宝がられる。英語の電話を受けて、すらすらしやべつたら、一目置かれること請け合い。

グローバル化

最近、グローバル化という言葉が盛んに叫ばれている。では、グローバル化とは何か。本来の意味は、世界人という意識をもって活躍することだ。

今すべきこと

私が考える、学生諸君の「今」すべきことを申し上げたい。英語と第二外国語を駆使できるようにすることを第一に挙げたい。

英語の読み書き話し聞くの4つの能力を鍛えるには学生時代が最もよい。もちろん、その気になれば何歳でもできるが、人の学習能力は、若いときほど優れている。英語が使えると、そ

化という意味よりも、一段下のレベルの実務能力がグローバル教育の柱となつていくように見える。実際、具体的は何を目指すかということになる。そうならざるを得ないのかもしれないので、あえて、それに異を唱えることはしない。

研究室対外予定

12月20日〜22日、計測自動制御学会システムインテグレーション部門発表会に、岡田君と田中が参加、発表▼12月16日〜1月31日、当研究室開発の来場者カウンタとラジオ体操探点システムを、バンドー青少年科学館に展示、実演（体操システムの実演はそのうち2日で日は未定）

編集後記

今年も、気づけばあと3週間となりました。どんな1年だったでしょうか。来年、どんな1年になるかは、「1年の計は元旦にあり」というように、まず、正月、自分をしっかりと見つめて、来年やりたいことを考えることです。

自分探しはするな

自分の人生で何ができるかということ、自分が何になりたいかという計画を立て、それに向かって進むことでほぼ達成できることは多くの人が言っている通りである（本をよまなければそうことを知ることがな



いだらう)。自分が何に向いているのかわからない。だから自分探しをするという人には、おやめなさいといいたい。若い時分は何にでもなれる。逆に、若い人にはまだ自分の中身はない。だからそれを探しても何も見当たらず時間を棒にふるだけになる。

私が皆さんにお勧めすることは、上にいろいろ書きみて、読んで、読まない人も多いのでは。自分に向けたメッセージをきちんと受け止めるというところが本当のスタートでしょう。